2012年度卒業研究

地方都市における若者の価値観と意識

藤女子大学文学部

文化総合学科　0915029

氏名　岸田　夏奈

担当教員　野手　修

目次　　頁

はじめに・・・1

第１章　階級理論と階層理論・・・2

1－1　階級・・・2

1－2　現在の階級に対する見解・・・2

1－3　日本における階級（大橋方式）・・・4

1－4　階層・・・5

1－5　日本の階層構造・・・5

1－6　階級と階層の違い・・・ 6

1－7　階級、階層概念の結論・・・6

第2章　階級のあり方について・・・7

2－1　新しい階級社・・・7

第3章　フィールドワーク・・・9

3－1　「読み書き能力の効用」リチャード・ホガート・・・9

3－2－1　道内の人口・・・10

3－2－2　人口規模・・・10

3－2－3　他地域と比べた時の将来推計人口・・・10

3－2－4　函館の失業率・・・11

3－2－5　函館の歴史・・・11

3－2－6　街の特徴・・・12

3－2－7　経済面・・・12

3－3　聞き取り調査・・・12

3－4　聞き取り調査の結果と考察・・・16

おわりに・・・18

引用文献・・・19

引用 URL・・・19

参考文献・・・20

はじめに

近年、進学や就職による地方の若者の人口流出が問題となっている。総務省の人口に関する調査の各都道府県の人口推移のデータによると、地方都市から中核都市、さらには大都市へと人口が流出しているのが分かる。そういった若者は雇用機会や高賃金を求め都市部へと出て行くが、一方で、地方に残る若者も一定数存在する。

従来から「「世帯の収入」が生活満足度に及ぼす影響が一番大きい」(間々田 1993:92)という見方が多い。その中で、あえて地方都市に残る若者は何かを基準とし、何かを思い生活しているはずである。または、向上心が薄い可能性や、都会には出ていけない理由があるのかもしれない。この点を明らかにするために、地方に残るという考えに至った若者の価値観や意識を、フィールドワークを用いて調査する。

現在の日本社会で彼らの行動パターンを考察する上で、階級や階層の概念の有用性がまず問題となる。戦前の日本社会は封建制による華族制度をもち、高等教育が少数のものに限られ、都市でも農村でも貧富の差が大きく、社会移動の可能性が小さい。その意味でヨーロッパ 19 世紀型の階級概念が比較的よくあてはまる社会であり、戦前までは日本も階級に当てはめて考え得る社会であったといえる。この概念は現代においても妥当なのだろうか。また、「工業化を遂げた最初の国であるイギリス」を例に述べると、階級は「伝統的なエリート、地主、貴族といった上流階級、増大する企業家からなる中産階級、労働者階級、そしてその下には、もっぱら工業化の犠牲者である貧困生活者という構成であった。」(シーブルック　2004:38) 本論の対象となっている地方に残る若者達は、この階級概念に当てはめると、労働者や貧困生活者であると言える。

しかし、このような階級に関する見解をそのまま当てはめようとするのは、現代の階級の定義の曖昧さ故、危険なものである。「彼らはすでに、自分たちの「階級」についてよりも、自分たち「個人」について、より多くのことを開示してくれている。」(ホガート 1974:18) ように、当事者たちも階級は意識しておらず、他者の目もすでに個人へと向けられており、階級概念への違った見方もなされているようである。

本研究では、あえて地方都市に住む若者はどこに価値観を置き、何を意識しているのかについて、現代における階級概念の有無を含めて明らかにしていく。

第 1 章では、階級や階層の概念について述べる。第 2 章では、現在の階級の在り方について述べる。第 3 章では、ホガートの著書「読み書き能力の効用」を参照とし、さらにフィールドワーク対象者が住む函館の経済状況などを明らかにしつつ、実際に聞き取り調査

を行う。また、対象者に見られた共通点から、その特徴を考察する。

第１章　階級理論と階層理論

「階級において代表的なのはマルクス主義的階級概念と、ネオ・ウェーバー主義的階級概念だが、その他にも社会移動研究者の一部に、世代的な継承性や閉鎖性が強く固定的な社会階層または社会諸階層の一群を「階級」と呼ぶ用法が見られる。さらには「年齢階級」「所得階級」などのように、単なる統計的カテゴリーを階級と呼ぶ場合や、上層階級・下級階級のなどというように「階層」と相互的に用いられる場合も少なくない。」

（橋本　1999:4）このように、階級や階層に共通の定義があるわけではない。しかしながら研究者によって全く違う解釈ではなく、その内容は概ね似たものである。本章ではまず、階級と階層２つの概念を理解していく。

1－1. 階級

階級についてはどの論者も概ね「同じような経済的地位を占め、このために同じような労働のありかたで、同じような収入水準の元にあるような人々のグループ」であるという見解を示している。

起源や言語についても概ね「階級という言葉は人間集団の経済的、社会的地位を意味するが、その起源は比較的新しく、現在のような用法は１８世紀中頃のものである。語源はラテン語のclassisであり、古代ローマ人が課税の目的で六つの分身（orders）に分けられていたことを指している。」（シーブルック 2004:25）というような見解である。

階級が誕生したのは18世紀後半、イギリスである。この時期のイギリスには、前世紀の末、名誉革命によって成立した政治体制が確固として存在していた。安定した政治体制の中、王制と貴族生徒に結びついた古くからの支配層は上流階級と呼ばれるようになり、新しい社会の支配的階級である工業ブルジョワジーは、この上流階級の下に位置する中流階級となった。中産階級は、経済的には大きな実力を有していたにもかかわらず、みずからの経済活動が許されているかぎりは政治的支配を伝統的支配層に委ねて満足し、みずからを中流と意識するようになった。中流階級が上流階級と戦うことなく、自らを中流階級であると認識したため、階級は成立したとされる。

そして、産業革命により、労働者の生活が農村部から都市部に移ると、共同体の概念が無くなるのと並行して、労働者の中に新しい「絆」を求める動きが進んでいた。その絆は、

ユニオン（組合）として、形となり、闘争が繰り広げられた。組合の闘争の形態もまた多様であったが、これもまた制度化された。このような労働者の結束に対して、中流階級の親方たちも共謀したことで、敵対的な集団として階級が意識されるようになったのである。

また、橋本（1999）は、階級とは生産諸関係内で占める位置を共有する諸主体の集群であるとしている。階級は、社会諸現象の分析の基本的な単位を構成しているのである。また、日本は格差の無い平等な社会と日本国民に思われているため、古い意味での階級はもはや存在していないという見解を示している。しかしながら実際には、主要２５か国が平等度順に５ランクに分けられる調査結果の中で、日本がインド・スリランカ・メキシコなど最も不平等な国々の次に不平等度の高い、第４ランクに位置づけられていることを挙げ、そこに実証的根拠が無いことを指摘している。

1－2. 現在の階級概念に対する見解

マルクスは『ドイツ・イデオロギー』や『資本論』の著者である。封建的な身分制度は解体されたが、「市民社会」成立は同時に「労働市場」の形成をもたらしたと主張した。労使関係が成立し、雇用者＝資本家と被雇用者＝労働者の二分化が起こっていた。最大の問題は、労使関係が商品経済に組み込まれた点である。資本主義経済は消費者の需要のために商品生産をするのではなく、新商品を開発して需要そのものを創出するのである。資本は「自己増殖する価値」であり、際限なく膨張し、企業間の熾烈な競争を生む。この結果、資本主義社会は物質的には豊かな社会であるが、労働者は低賃金・長時間の労働を余儀なくされ、労使間対立は激化する。資本家階級（ブルジョワジー）が労働者の剰余価値を搾取することで、 労働者階級（プロレタリアート）は人間性を喪失しているのである。

しかし現代では、このマルクス主義の信憑性はほとんど無いとされている。キャナダイン（2008）は「唯物論者がマルクス主義モデルを作るのに原動力となった経済発展の形態はかつて主張されたほど、整然とした発展でもなければ単純でもなかったことがいまではっきりした。１７世紀における資本主義の発展、18 世紀末から 19 世紀初頭の産業革命、19 世紀末から 20 世紀初頭の間に起こった新技術の進歩、両大戦間期の消費者指向産業の成長、偉大なヴィクトリア朝期の主要産業が 1945 年以降に衰退したこと。こういった経済変化の諸局面をよく調べてみると、全てが複雑で、多様性に富み、漸進的な発展であることが分かった。これは、経済における変化が、相互に永久的な闘争の泥沼にはまっていく、地主、資本家、労働者からなる、均質的で階級意識に目覚めた３つの階級の創造を可

能とし、実現させるほど、重要でもなければ明白でもなければ幅もきかせていないことを意味した。」と主張している。

また、「ピーター・カルヴァートのような学者は、階級という概念の有効性はすでに失われたと述べている。現代社会の複雑さはマルクスが記述したような対立を社会から消し去り、言葉そのものがほとんど（まったく）価値を失っているし、社会指標としても信頼できないというのである。これに対し、社会学者であるリチャード・スケースは、こうした複雑さにもかかわらず、労働機能の誇張（消費者社会のなかでの販売、小売り、娯楽といった労働）という現実は、労働者と、彼らの労働から利潤を得ている者との関係を変化させるものではないと主張している。」（シーブルック　2004:51）というように、マルクスの主張は否定される傾向にあり、現在の階級概念の見解に対してもさまざまな議論がなされている。

1－3. 日本における階級(大橋方式)

戦後日本において階級研究は、1950年代からはじまる大橋隆憲の研究、とりわけその成果を広く世間に問うた『日本の階級構造』を画期として、「階級構成表の作成」という独特の展開を示した。大橋方式は基本的に、国勢調査報告書における就業上の地位と職業のクロス集計表をもとに資本家階級、自営業者層、労働者階級を主な3カテゴリーとする階級構成表を作成するというものである。1965年の階級表の特徴として、資本家階級と労働者階級の間に新中間階級のような、独自の階級、階層の存在を認めず、これらを労働者階級内部の「いわゆるサラリーマン層」として扱っていること、第二に「旧中産階級」のような独立した階級の存在を認めず、農民・自営業者を「自営業者層」と呼び、労働者階級と同様に「被支配階級」を構成するものと規定していることが挙げられる。そして、このような階級カテゴリーを採用する際に、政治的な配慮や特定の政治戦略が介在したと考えられているのも特徴の1つである。尚、この大橋の階級カテゴリーは、定説とされ、一時多くの研究に使用されることとなった。

しかしこの「大橋方式」は前述の通り、特定政党の政治戦略とともに結びついたいくつかの政治的仮定や、理論を政治実践に従属させる政治主義が蔓延しており、このことが階級理論に対する信憑性を低下させ、研究の沈滞を招いた。

では、階層についてはどのような見方がされているのだろうか。

1－4. 階層

階級と同じように、階層に関しても概ね「人々にとっての欲望の対象である諸種の社会的資源（物質的資源・関係的資源・文化的資源）が不平等に分配され、その結果社会的地位の異なる人々が複数の階層をなしてつらなっている構造状態のことである。」とされている。

例えば、金持ちと貧乏人、上流階級と労働者階級、親の七光りと成り上がり、貴族と平民、親分と子分、士農工商、身分、カースト、奴隷といったこれらの表現は、人々が異なった経済的条件、権力関係、名誉、評価の中で生活していることを表している。つまり社会の中には分化したいろいろな地位があって、それらの地位には、様々な報酬や社会的資源の獲得機会に格差や不平等があることを示している。

その不平等さを人々に実感させることになったのはバブル経済が盛んだった時期である。この時期に階層消費なる言葉が生まれた。60 年代は国民的なヒット商品があったが、70 年代半ば以降はそういうものはない。それは消費の多様化、個性化と言われてきたが、実は階層化に過ぎないのではないかという議論だった。しかも、そうした階層差が生じる原因として指摘されたのは、東京圏の場合では、東京近郊に持ち家を持っているかであった。（小沢　1989）

さらに階層は、世代間移動が難しいという特徴があるとされている。近代化の途上では、前近代的な身分制度の廃止、農村から都市、伝統産業から近代産業への人口移動などが起こるため、世代間移動が増加するだろう。しかし産業化がある程度まで進み、階層構造が安定化すれば、上に挙げたような要因はさほど重要ではなくなっていくはずだ。さらには、自分たちの地位を確立した近代的な上層階層は、次第に閉鎖性を強めていくかもしれない。

こうして、産業化のある段階までは移動が増加するが、後には移動は一定になる、あるいは反転して減少する「移動不変仮説」「固定化仮説」ともいうべき主張が生じるようになる。

1－5. 日本の階層構造

戦前階層のデータ分析は不可能であるが、概括的にいって、戦前の日本社会は封建制の遺物としての華族制度をもち、高等教育が少数のものに限られ、都市でも農村でも貧富の差が大きくて社会移動の可能性が小さい。その意味でヨーロッパの階級概念が比較的よくあてはまる社会であったと考えられる。これに対して戦後は、まず占領下において、農地

改革によって戦前農村の不平等の根元であった寄生地主制が「革命的」といってよいまでに解体され、産業においては財閥解体と労働立法によって企業間関係および労使関係の徹底的民主化がはかられ、教育改革によって高等教育の大衆化が実現され、ついでシャウプ税制によって所得税における高率の累進課税が定着し、これらのことが、すべて完了した後に日本経済が技術革新と高度成長の段階に入ったことによって、一般庶民が経済発展の果実を享受し得る体制、すなわち平等度の高い社会階層構造が実現することになった。

1－6. 階級と階層の違い

階級概念はマルクスが唱えたものであり、生産手段の所有、非所有や階層概念など基準が様々である。「工業化における階級の議論に影響を与えてきたのは哲学者カール・マルクスである。彼は階級的利害を二つの立場、つまり、資本所有者と、労働力以外売るべきものを持たない人々とに還元した。」（シーブルック　2004:25）

一方階層は、人々にとっての欲望の対象である諸種の社会的資源（物質的資源、関係的資源、文化的資源）が不平等に分配され、その結果、社会的地位の異なる人々が複数の階層をなして連なっている状況が形成される状態のことである。

階級と階層の決定的な違いとして、階層は個人的移動が可能なのに対し、階級社会では原則として不可能であることを挙げたい。上昇志向、個人的な上昇が可能で有れば、自分一人ではいあがろうとするだろう。しかし上昇が被支配階級に全く不可能であれば、彼らの上昇の可能性は階級的に連帯し、革命を起こすことしかなくなる。個人的な上昇の可能性は被支配階級の利害の共有を弱める結果となる。

1－7. 階級、階層概念の結論

社会資源（収入、学歴、職業）が不平等であるが故、階層構造自体は今も確かに存在し、これからも存在するであろうが、それはあくまでも横割りの文化にすぎないのである。言い代えるとこれは、収入や学歴、職業などによってカテゴライズされる１つのグループである。一方、階級は縦割りの文化である。上の者と下の者という意識がはっきりしている。階級は「論者によって多少違うとはいえ、おおむね共通の意味合いが含まれる。それは、同じような経済的地位を占め、このために同じような労働のあり方、同じような収入水準のもとにあるような人々のグループ」（橋本　2007:107）なのである。そして、現在の日本の状況を見てみると、誰かが働き、誰かが利潤を得るという意味では、人々は幅広く労

働者階級に当てはまり、本論で調査の対象とした、「地方に残る一定数の若者」のみが、その中に含まれているわけではない。しかし、現代において、キャリアを持たず低賃金で働き続ける労働者や、職を転々とするフリーターとしての働き方がひとつの典型になっている中で、資本家階級に雇われて働く人々は上下に引き裂かれ、内部の多様性は極限まで大きくなってしまったため、「賃金を受け取って働くものは、みんな同じ労働者だ」という前提は、もはや存在しないのである。(橋本　2007)

2章　階級のあり方について

2－1. 新しい階級社会

人々の労働形態や、社会的な流れが変わっていく中で、マルクスが唱えた階級社会の定義と現在の状況は違ってきているというのは、前述の通りである。階級構造がより複雑になったため、搾取するのは資本家だけではなくなった。

橋本(2007)は、この新しく複雑な階級社会において、資本家階級(平均年収645万円、335万人)、資本家階級の元で働く被雇用者でありながら、組織の中の地位や技能・資格を持っているために、労働者階級を搾取することができる新中間階級(平均年収535万円、1221万人)、その下の正規雇用の労働者階級(平均年収347万円2288万人)、さらに下のアンダークラス(平均年収151万円、1382万人)に分類されると考えている。さらに「マルクスが指摘したように資本家階級が被雇用者全体を搾取する一方で、資本家階級とともに中間階級が労働者階級を搾取し、さらには資本家階級とともに労働者階級まで含んだ正社員全体が、派遣社員、請負社員、フリーターなどのアンダークラスを搾取するという、重層的な搾取関係が成立している。」と主張している。また、その特徴として、資本家階級とは主に従業員が5人以上の会社や商店などを経営する、中小零細企業の経営者を指している。新中間階級は被雇用者のうち、専門職、管理職、そして管理職につながるキャリアをもつ事務員である。正規雇用の労働者階級は、6割を占めるその他の職業の正規雇用者であり、アンダークラスを、配偶者の居る、いわゆるパート主婦を除いた非正規雇用の労働者としている。

三浦は、橋本の言うアンダークラスと同じ意味合いで、これを「下流社会」と位置づけた。さらに、「「下流」とは、単に所得が低いということではない。コミュニケーション能力、生活能力、働く意欲、学ぶ意欲、消費意欲、つまり総じて人生への意欲が低いのであ

る。その結果として所得が上がらず、未婚のままである確立も高い。そして彼らの中には、だらだら歩き、だらだら生きている者も少なくない。そのほうが楽だからだ。」（三浦 2005:7）というように、その文化的な側面を特に調査対象としている。そしてその理由に関して、団塊ジュニア以降は社会全体が中流化したからであると述べる。中流化された社会においては、みな同じような収入、格好、住宅であり、下から上へ這い上がろうとする機会が少ないため、その意欲が根本的に低いという。

また、原、山内（2009）は低賃金で働き続ける若者を「使い捨てられる若者たち」とし、彼らの実状を「学力」を軸に考えている。低所得（フリーター層）が生まれる理由として、バブル経済崩壊後に正社員雇用が狭き門となってしまったことや、90 年末からの規制緩和により、派遣社員や日雇い労働などの働き口が増大したこと、ゆとり教育によりにより授業時間や学習内容が削られ、特に低学力であった子供たちの学力がさらに低下したことに伴い二極化の側面を生み出したこと、さらには現代の家庭環境が変化したことで、早い段階での自立を促す過程が増え、早期段階で社会に出た者は離職率が高いことから、結果的にフリーターとして働く若者が増えたということを挙げている。

さらに橋本（2007）は、このような若者たちが、現実から逃避し、自分たちを「下流」に押し込めている現実から目を背け、気づくことなく搾取されるだけに留まらず、怒りや抵抗を反映したような数々の事件が起こり、また、泥臭く、ときに惨めで、あるいは残忍な下層階級の姿が漫画や小説、映画などの大衆文化に表れているという。

前述の通り、古い階級概念は無くなったが、新しい階級概念や、階層概念は確かに存在し、その多くは若年時の進路決定により大きく左右されるようである。

地方は職や高等教育機関も少なく、その後の生活水準も低い。本研究では高校卒業後専門的な知識を身につけるでも、大学に進学して正社員の道に繋げるでもなく、フリーターや派遣、請負社員、契約社員としての「アンダークラス」または「下流社会」への道を進むに至った理由を探る。

3章フィールドワーク

フィールドワークに入る前に、三浦の理論が少々極端である事を踏まえ、別の視点として、階級社会について述べたリチャード・ホガート著の「読み書き能力の効用」をカルチュラル・スタディーズおよびフィールドワークの参考とする。

3−1.「読み書き能力の効用」リチャード・ホガート

著者のホガートは1918年、イギリス、リーズの労働者階級出身である。日本での出版は1974年であるが、実際には1957年に発行されていたため、時代背景もその時のものである。内容は、労働者が読み書き能力を体得したことが、彼らの文化にどのような影響を与えていったかを分析するものであり、ここでフィールドワークを用いている。

労働者階級の人間について述べるときには、その母親、父親の特徴に分け、出身、見た目、話し方やよく使う言葉、食生活、金銭面などについて事細かに分析し、どのような思考の人間が、どのような生活を送っているかを、自らの体験も交えつつ徹底的に調べ上げている。例えば「母親」の生き方について、母の生活は大変きつく、朝起きてから寝るまで、家のことにずっとかかりっきりであるものだとしている。料理し、洗濯をし、子供の面倒を見、買い物をし、一日を終えるという。当時彼らの階級の家庭は、電気掃除機や電気洗濯機といった手助けになるような現代的道具のほとんどない生活であり、それにも関わらず、より豊かな地域では、相手にしなければならないゴミ、汚れは前よりもずっと多くなっているという。彼女たちのほとんどが「よごれっぱなしにしておけない」という意識を持っている。靴下を縫ってあげたり、着物にツギを当てたりするのも彼女たちの仕事でるが、新しい服を作ることは滅多に無い。完璧な技術を持っていないという理由もあるが、ミシンを買えないのである。1ペニーから「足が出てしまう」家計をやりくりしているためである。

このように事細かに調査することで、彼らの生活の実態、また、価値観や意識を探り出しているのである。

内容は、基本的な読み書き能力の向上は、新聞、雑誌、ラジオなどのメディアを通して労働者に独特の倫理観や人生観を与えたが、戦後にアメリカの平等文化が入ってきたことにより、かつてあった労働者階級の独特の大衆文化は薄れていったというものである。他の階級に関する著書とは違い、社会的背景の変化はあまり触れられず、上記のように労働者階級の人々の文化的な側面ばかりが語られているのも特徴的である。

特筆すべきは、労働者階級へのアプローチにおける、あくまで被検的視点から、人類学的な手法を用い、フィールドワークを行っている点である。本研究では、この手法と考え方を生かしたい。

さらに、フィールドワークを行うにあたり、地域の特性も考慮する必要がある。以下は道内外の人口や、インフォーマントが住む函館の特徴などをまとめた結果である。

3－2－1. 道内の人口

北海道の人口は全国の4.4％を占めるが、他県への流出等によりその比率は低下しており、道内では札幌等、道央への集中が強まっている。今後、全国を上回る早さで人口減少が進み、平成42 年までに15％程度の人口減少が見込まれる。

3－2－2. 人口規模

北海道の総人口は563 万人（H17 国勢調査速報値）で、全国の4.4％を占める。国内におけるウェイトは、5％台前半で推移していたS20-40 年代前半に比べれば低下しているが、国内では千葉、兵庫、福岡の各県、海外ではデンマーク、フィンランド等の国と同規模の水準にある。道内地域別では、札幌都市圏を含む道央への集中が強まる傾向があり、H17 時点では61％、うち札幌都市圏が42％を占めている。逆に、他地域はいずれもウェイトを下げており、帯広・釧路等の道東が18％、旭川等の道北が12％、函館等の道南が9％となっている。

3－2－3. 他地域と比べたときの将来推計人口

（人）

人口	S30	S40	S50	S60	H7	H17	H27	H42
全国	9,008	9,921	11,194	12,105	12,557	12,776	12,627	11,758
北海道	477	517	534	568	569	563	541	477
東北	1,181	1,151	1,162	1,221	1,232	1,207	1,184	1,073
北関東甲信	805	790	860	948	1,002	1,010	1,003	930
首都圏	1,542	2,102	2,704	3,027	3,258	3,447	3,465	3,346
北陸	274	276	291	309	313	311	300	269
東海	949	1,093	1,273	1,381	1,455	1,502	1,473	1,366
近畿	1,281	1,578	1,883	2,008	2,063	2,089	2,065	1,916
中国	699	687	737	775	777	768	740	664
四国	425	398	404	423	418	409	395	351
九州	1,294	1,237	1,242	1,328	1,342	1,335	1,320	1,224
沖縄	80	93	104	118	127	136	141	143

構成比	S30	S40	S50	S60	H7	H17	H27	H42
全国	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
北海道	5.3%	5.2%	4.8%	4.7%	4.5%	4.4%	4.3%	4.1%
東北	13.1%	11.6%	10.4%	10.1%	9.8%	9.4%	9.4%	9.1%
北関東甲信	8.9%	8.0%	7.7%	7.8%	8.0%	7.9%	7.9%	7.9%
首都圏	17.1%	21.2%	24.2%	25.0%	25.9%	27.0%	27.4%	28.5%
北陸	3.0%	2.8%	2.6%	2.6%	2.5%	2.4%	2.4%	2.3%
東海	10.5%	11.0%	11.4%	11.4%	11.6%	11.8%	11.7%	11.6%
近畿	14.2%	15.9%	16.8%	16.6%	16.4%	16.4%	16.4%	16.3%
中国	7.8%	6.9%	6.6%	6.4%	6.2%	6.0%	5.9%	5.6%
四国	4.7%	4.0%	3.6%	3.5%	3.3%	3.2%	3.1%	3.0%
九州	14.4%	12.5%	11.1%	11.0%	10.7%	10.5%	10.5%	10.4%
沖縄	0.9%	0.9%	0.9%	1.0%	1.0%	1.1%	1.1%	1.2%

Ｈ１７までは総務省「国勢調査」、Ｈ２７以降は社会保障・人口問題研究所「将来推計人口」

地域ブロック

東北・・・青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、新潟県

北関東甲信・・・茨城県、栃木県、群馬県、山梨県、長野県

首都圏・・・埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県

北陸・・・富山県、石川県、福井県 東海・・・岐阜県、静岡県、愛知県、三重県

近畿・・・滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県

中国・・・鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県

四国・・・徳島県、香川県、愛媛県、高知県

九州・・・福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県

3－2－4. 函館の失業率

総務省が発表した、函館の 2011 年の完全失業率は 8.8%である。完全失業率は年々上がっている。これは道内各地でも同じであり、その理由として、これまで北海道経済の牽引者的な役割を果たしてきた公共事業が、北海道開発庁の統廃合や開発予算の特例措置廃止等により、役割を大きく後退させたことや、H12 年 3 月の有珠山噴火の影響が全道に広がり、長期間にわたって大きな打撃を受けたことが挙げられる。さらに、ＩＴ・ソフト産業は日本経済の長期的は景気後退の影響を受けて拡大しておらず、このような経済的な困難を克服するいとまもなく、苫東開発の破綻、雪印乳業の不祥事、BSE(牛海綿状脳症)の発生、エア・ドゥの破綻、北方４島をめぐる政治スキャンダルなどが景気後退に追い打ちをかけたことなどが挙げられる。

3－2－5. 函館の歴史

本州からほど近い北海道南端に位置し、津軽海峡に面した函館は、18 世紀末より港部が発達し始め、1869（明治 2）年に開拓使出張所が置かれたことをきっかけに、行政面でも北海道の玄関口として成長し、航運行や、水産業、造船業を主とした港湾都市としての発展が見られた。その後行政の中心は札幌へと移るが、函館は本州からやってきた人々が船から鉄道へと乗り換える交通拠点として重要港湾都市の存在を大いに発揮した。しかし過去 30 年間には造船所やその近隣産業地区は、交通網の変化や日本の産業の空洞化のあ

おりを受ける等の結果、函館市の歴史地区での存在力を失っている

3－2－6. 街の特徴

函館は観光業が盛んである。幕末から明治期の歴史的事跡や、開港による欧米文化の影響を受けた建築物などの醸し出す独特の雰囲気が特徴的であり、また、函館山からの夜景も重要な観光資源である。その地形から、海産物も多く獲れ、多くの観光客を集める。これらのことから、第三次産業での雇用が多いが、他産業と比べ、低賃金かつ安定性に欠いているのが特徴的である。

3－2－7. 経済面

総務省統計局『統計でみる市区町村のすがた』によると

歳入額は 123659（百万円）で 67 位（1750 中）、歳出額は 122598（百万円）で 60 位、地方税額は 33856（百万円）で 122 位、総人口は 294264（人）で 88 位である。また、第一次産業就業者割合は 4.2%で 1286 位、第二次産業就業者割合は 18.8%で 1505 位、第三次産業就業者割合は 77.0%で 112 位である。(2011 年)

3－3. 聞き取り調査

地方都市（函館）に残る若者３人に聞き取り調査を行った。２人は男性、１人は女性である。調査日は 11 月 4 日～11 月 20 日、いずれも直接聞き取り調査を行った。

A（男性）

A は現在 21 歳で、工業高校卒業後、鉄鋼関連の会社の派遣社員として働いている。内容は主に事務関係。関連会社も含め、勤続は３年目である。学生時代は、いわゆる「やんちゃ」なタイプであった。実家住まいである。

進学の考えは無かったのか尋ねると、「自分すぐ働きたかったんです。」と言う。「高校卒業する前、進路決めるとき、なんかもう親にこれ以上頼ってんのが恥ずかしくなって」「勉強とかは、自分できるタイプじゃなかったし、部活忙しかったし、中高って部活やってれば良い、みたいなとこあるじゃないですか、男でやってないやつって実際ダセーの多かったし。」「高校出るときに、やりたいことなかったってのもあります。友達の中には建設系の資格とか取って、将来やりたいことあるからって、大学行ったり専門行ったりする

やつも居たけど、自分からしたら意味無ぇって感じでしたから。そんな金も余って仕方ない感じでもなかったし。」と振り返った。彼が卒業した工業高校は就職率も高く、関連求人も多い。そのことも彼を就職させる原因のひとつになった。仕事について訪ねると、「でも思ってたのと全然違った。仕事内容ね、工業出てっから、生かせるんじゃないかなーと思ったけど、全然。まぁ、（学生のときに学んできたことと仕事が一致しないのは）この仕事だけじゃないと思いますけど。」「同年代の同期少ないから、辞めちゃおうかなぁとか思いますね。出会いないし、給料安いし。」他の場所に行くという考えはないのか訪ねると「ここから出るなんて考えは、元々無いですね、だって、（本州は）暑いし、だいたい、行ってどうなるって話ですよ。親だってばあちゃんだってこっちですから。」と答えた。将来に対しての質問には「将来とかまだわかんないけど、普通に結婚して子供居る家庭がいいってのはあります。なんか結婚した友達見てると、めっちゃ幸せそうだし、子供かわいいし。」と答えた。また、余暇に関して「休みは車、酒、マージャンって感じ、だいたい車いじって飽きたら酒で、それも飽きたらマージャンでってローテーションです。最近はスロットもよくやります。」不安はあるかとの問いには「やっぱ正社員じゃないから、給料上がりにくいってのがあって、不安は不安ですよ。でも若いから、今は働き口はあるっちゃあるんですよ。おっさんになったときにどうなるかはわかんないですけどね。どうにかなるっしょ、今までも大丈夫だったし。あと最近、自分の父さんのことめっちゃ尊敬するようになりました。自分から見たら普通の親父だったけど、会社員（正社員）だし、俺も兄ちゃんも育てたし。そういうのつまんねぇって思ってた時期もあったけど、本当は結構むずいことですよね。」現在の生活に満足しているかという問いには「まぁ、そこそこですね。だいたい人生が見えてきたので、子供の頃みたいに、無謀な夢は持たないです。諦めるものは諦めるし、それでいいと思ってます。もっと勉強してたら、とか、家が最初からすごい金持ちだったらって思いはしますけどね、そんなこと言ったって無駄な話ですし。満足してますよ。」と返ってきた。

B（男性）

Bは現在22歳で、私立高校普通科を卒業後、土木工事現場の作業指示の仕事をしている。雇用形態は正社員であるが、彼いわく「下請けの下請け」であり、「急に切られることもあるかもしれない」という。勤続４年目である。

進学の意思は無かったか訪ねると「進学したいところが無かったし、先生の紹介があっ

て、就職にした」という。「親はすごい進学させたがってたけど、専門行くにも、それだけ興味あることって無かったし、大学ってなると、そこまで頭よくないし、もう勉強したくないと思って。」「そうやってはっきり言っちゃうと、親もそこまで言うならいいやってなったみたいで、すぐ就職した。就職してからは案外喜んでるわ、家に金も入れてるし。」仕事について訪ねると「すごい楽しい。最初、工事現場に入って行くの怖かったけど、だんだん慣れてくるし、やりがいもある。」「最初は現場のおっさんなんて、俺にひどい態度とるのよ。」彼は現場の作業指示という職業柄、年上の人に指示しなければならない場面が度々あるという。「おめーみたいな兄ちゃんの言うこと聞けるかって何回も言われたしね。俺も、自分の親より年上のおっさんたちにいうこと聞いてもらうのって、無理だって思っててさ。でも根気良く続けてると必ず見てくれてるもんで、ある日、たまには兄ちゃんの言うこと聞いてやるわって言われて。そこからはだんだん良くなってったね。俺みたいな若いのが、毎年１人は入るわけだから、あっちも恒例じゃん、今思えば度胸試しみたいなもんだったのかもな。ちょっといじってみるみたいな。」「今はもう４年目だからさ、この上に資格系の職があって、先輩とか見てるうちに、それ目指そうと思い始めた。」という。都市部へ行くことを考えなかったのか訪ねると「行く必要が無かった。函館なんもねーし、遊び場所とかあるの見てたら、東京とか札幌とか行ってみたいと思ったけど、タイミング的にそういうの考えなかったわ。高卒で就職するったら、まず地元で探すのが普通でしょ。」将来についてどう考えるかの質問には「俺がもうちょっと偉くなったら今の彼女と結婚したいって思ってる。あとこれは夢だけど、服作りたい。自分のブランドみたいなの作って、知り合いの店にでも置いてもらえたらめっちゃ嬉しいわ。そういうやつ居るしさ。」「結婚して子供生んで、じーさんになってぽっくり死んだらそれでいいんじゃね。子供は、とにかく強い子供にしたい。」余暇については「休みだったら、服関係のことやってるか、彼女どっかに連れてくか、買い物が多いかな。車洗ったり。パチスロもよくやるけど、彼女うるさいからあんま行かなくなったな。」と答えた。不安なことについて「このままうまくいけば、いいけどさ、職種的に給料上がんのがすごく遅めかなー。そこは不安、養っていけんのかとか。あとたまに自分がスーツとか着て会社員になってたら、って考えたりするけど、それはどう考えても気持ちわるいんだわ。自分っぽくないっていうか。」生活に満足しているかの問いには「給料低い以外は満足。働き出してから特に思うけど、充実してるなって思うし、夢もあるし、このままいけたらいい。人と比べてどうのってのは違うでしょ、自分は自分だし、ずっとそうやってきたし。」と答えた。

C（女性）

Cは現在21歳で、公立高校普通科を卒業している。その後技術関連の2年制専門学校に進み、PC技術を学ぶも、自主退学。スーパー店員、レストラン店員を経て、今はアパレル店員である。

中退の理由を尋ねると「家から遠くて、行くのからしてめんどくさいし、内容が意味わかんなくて続かなかった。」「入学するときには手に職つけたいって思ったんだけど、今まで継続してできたことってないじゃん、私部活だってすぐ辞めちゃうしさ、なんでもそうなの、本当続かない。免許ですらもうちょいで取れないところだったからね。（入校からの期限切れのため）」「親にはすっごく怒られた。何してんだ！って。せっかく入学金払ったのにって。」「それでぎくしゃくしてたのもあって、家出て、一回彼氏の家に住まわせてもらったんだけど、そこからずるずる一緒に暮らしてる」と答えた。仕事に関しては「フリーターだからね、お金が無かったら生活できないからとりあえず仕事は切らさないようにするけど、楽しいかっていったら、いつも楽しいわけじゃないかな、スーパーなんて31日も1日も仕事で、ほんとやってらんなかった。忙しすぎて、シフト入れられまくるし、むかついてむかついてやめたわ。レストランだったときは、バイキングなんだけど、お皿取り替えたりするの重いし、がんばってるとことかあんま見てくれない職場だったから、1年くらいでやめた。後から入ってきた人、私より仕事できないくせに、そっちだけ給料上げたりして、贔屓してきたんだよね。今服売ってて、大変なこともすごいあるけど、今までのバイトよりおしゃれな感じして気に入ってる。セールのときは忙しいけど、仕方ないかなーって思ってる。」他の地域に出ることは考えなかったか尋ねると、「東京はおしゃれだし、札幌にも出ていきたかったけど、理由が無かった。行きたい系の専門はこっちにもあったから、行こうとも思わなかったわ。旅行でなら行きたいかな。」と答えた。将来に関しては「多分今のままだと、彼氏と結婚するから、そしたら私の生活って彼氏にかかってるって感じ。本当はすごいお金持ちと結婚して、自分は専業主婦で、昼の番組見て過ごしたかったけど、彼氏も同じフリーターだし、自分もパートかなぁ。子供2人か3人、生みたいな。」余暇については「友達や彼氏と休みが合うときは、カラオケ行ったり、ご飯行ったり、飲みに行ったり。家に居るときは犬（2匹の小型犬を飼っている）と遊んでる。たまにドッグランに連れて行くかな。」不安については「うちはお母さんしか居ないから、どうやって面倒みていこうかと思って。あと10年とかは大丈夫だろうけど、介護とか必要になったら、施設もすごいお金かかるし、うちらの収入でやっていけるかなぁ

と思う。自分の親だけじゃなくて相手の親も居るしね。それじゃなくても、やっていけるか不安なのに。そんな贅沢してるわけじゃないけど、お金貯まらないし、ボーナスとかないし、時給もなかなか上がらないしね。」と答えた。満足しているかの問いに関しては「そこそこ。彼氏居るし、今すぐ死ぬってくらいお金ないわけじゃないし。うちらが不満って思ってることって、そこらへんのひとたちもだいたい不満に思ってる。遊び場所少ないとか、仕事無いとか、給料低いとか。」

3－4. 聞き取り調査の結果と考察

以上３人の聞き取り調査の結果、いくつか共通点が見える。

１つ目は「学習に対する向上心の低さ」である。Aは部活をやっていなかった人間に対して否定的な意見を持つ面が伺える。彼の中で勉強はできなくても、部活ができるタイプこそが価値のある人間なのである。Bもまた、大学や専門学校に対して、そこまで頭がよくないから勉強したくないという理由で切り捨てている。Cは、専門学校中退の理由に関して「めんどうくさい、意味がわからない」と言っている。また、3名は学習意欲が薄いが、そのことに関する罪悪感が薄い。ウィルス（1985）は、イギリスの労働者階級の子供たちが、優等生たちを成功者とする学校教育に反発する姿を「反学校の文化」としている。イギリスの労働者階級の子供たちは自らの価値を、男らしい荒々しさに見出し、結果、肉体労働者（労働者階級）のままであるという。優等生たちが成功者であるとされる学校のスタンスが、彼らのやる気を削ぎ、「部活やってない（勉強しか能の無い）やつはダサい」「スーツを着ている正社員の自分を想像すると気持ち悪い」という思考へと導いていくのである。３名皆が肉体労働者ではないが、優等生タイプに敵対心を持ち、その逆を行こうとする思考は通じるものがある。イギリスの肉体労働者たちがその男らしい荒々しさを誇りに思ったように、彼らも、進学をし、ゆくゆくは「スーツを着ている正社員」になるであろう優等生タイプとは違い、早い段階で自立をしている自分を誇りに思っている面がうかがえる。三浦（2005）曰く、団塊ジュニア世代男性対象の調査の結果、「生活の中で大切にしていること」として階級が高い人々は「自立・自己実現」をあげている人が16.7%なのに対し、「下流」の人々は29・2%と、その割合が高い。同年代女性の調査結果でも階級が高い人々では5.9%であるのに対し、「下流」になると19・４%である。

２つ目は「余暇の過ごし方」である。Aは「車、飲酒、マージャン」B「服、パチスロ」Cは「ご飯、飲酒、犬と遊ぶ」である。鈴木（2005）は「瞬間的な盛り上がり」によって

もたらされる「内的に幸福」な状態を「カーニヴァル状態」であるとし、「客観的には搾取され、使い捨てられる」という、カーニヴァル化する社会の危険性を指摘している。アルコールやギャンブル、飲酒など、瞬間的な盛り上がり重視の趣味を持つ彼らは正に「カーニヴァル化」する社会の人間に当てはまる。しかし、三浦（2005）は、現実には、客観的にはあまり搾取されていないとしても、それが自覚できず、あるいはそれだけで満足できず、内的には不幸である可能性を指摘している。

３つ目は「収入が低いため不満や不安を抱えている」点である。A は「正社員ではなく、給料が上がりにくいため」B は「昇給が遅いため」「養っていけるかが不安」C は「お金が貯まらない、給料が少ない、仕事が無いため」「親の面倒を見られるか心配なため」である。

４つ目は幸せの定義である。３名の聞き取り調査を行った際に印象深かったのが、彼らの将来の展望がほぼ同じという点である。3 名とも結婚願望があり、さらに子供の居る家庭を持つことを想定していた。加えて、その言い回しは、将来はほぼ確定であるというような雰囲気である。彼らの中で「結婚して子供は２，３人」という図が固定されている。しかしその内容が具体性を欠いているのも特徴のひとつである。子供をどうしたいか、ということに関する答えになる部分はあったが、例えば「～歳までに結婚し、将来は年収〇百万、何歳くらいでマンション（家）を買えたら」などという具体的な話をすることはなかった。目標設定が低いことが考えられるが、年収や展望が不安定な中、目標を立てにくいというのが実状である。

５つ目は、「進学や、その他の都市に出る必要性をあまり感じない。」という点である。彼らは地方に居る目的こそ述べることができるが、その目的を達成するために都会に出たり進学したりする必要はないのである。コツコツと勉強を重ね、良い大学に入り、良い会社に入る、安定性がある生活というような、古く、一般的であるようなことを、彼らは目標にしない。

おわりに

第1章で述べたように、階級と階層の間には違いがあり、本来の意味での階級制度はもはや薄れている。一方、社会資源が人々に平等に与えらない限り、また、人々の欲求がある限り、階層は存在するものである。そして、2章で述べたように、階級は新しい形として、今も社会に大きな影響を与えている。そこで注目されるのが、今まで無かった層が、正社員雇用ではない、アンダークラスや下流の人々である。バブル崩壊後からの不況の影響もあり、以前は当たり前であった、「普通に勉強していれば普通に生活できる」という考えが通用する時代では無くなった。その結果、なんとしても成功したい者との差が広まり、学校での二極化が進む。優等生の基準に漏れてしまった生徒は、意欲が削がれ、勉強をしなくなる。部活などに打ち込んでいるのならばまだ良い方で、「グレる」者や、何の活動にも参加しないまま、生活することになる生徒も居る。

こうして、学生の頃から高い目標を持たず、その達成経験もないまま社会に出る層が一定数生まれる。学生時代を「自己流に」過ごしてしまうと、進路選択の時点で、気がつくと「都会に出る意味がない」「行きたい学校はあるが、学力が足りない」という状況になっているのである。当人達は至って自然な流れでここまで生活してきたが、現代において受動的な姿勢はアンダークラスや下流の人々を生み出すことに直結する。聞き取り調査内でAは「無謀な夢は持たない、諦めるものは諦めるし、それでいいと思っている。もっと勉強していたら、とか、家が元々金持ちだったらって思いはしますけど、無駄な話ですし。」と発言している。また、Cは「本当はすごいお金持ちと結婚して、自分は専業主婦で、昼の番組見て過ごしたかったけど、彼氏も同じフリーターだし、自分もパートかなぁ」という発言が、その状態を物語っている。目標達成の経験不足により、目標達成のプロセスを組むのが不得意と言える。

しかしながら古い労働階級の概念が無くなっているように、社会の状況により、このような現状も変わっていくものである。ホガート（1974）は、労働者階級の中の「熱意ある少数派」について述べている。具体的な人物像として「労働者教育協会の各クラスに参加し、過程をやり通したりする者」（ホガート 1974:250）である。聞き取り調査でBは「この上に資格系の職があって、先輩とか見てるうちに、それ目指そうと思っている。」と述べている。当然、アンダークラスである下流の人々の全てが、大人になっても必ずしも学生時代と同じように意欲・向上心が低いままではない。仮に彼が資格を取り、正社員採用され、出世・昇給したとすると、それはもはやアンダークラスとは言えないのである。こ

の中では少数派である彼が、その他大勢に与える影響は決して大きくはないだろうが、アンダークラスの中には、他のクラスに移動する者も居るという証明にはなるのである。

以上の事から、地方都市の若者はその社会状況や本人が学習を重要視しなかったこと、今の状況のままで大体のことは満たされていると感じている価値観や意識から、地方に残っていると言える。その背景には社会によって作られた、新しい階級の実態が見える。

また、学生時代の優等生以外が、ほぼ必ず低い生活水準に落ち着いてしまうのでは無く、このような「クラスチェンジのチャンス」の機会が多い社会が望まれる。

引用文献

橋本健二著『現代日本の階級構造』東信堂　1999 年 p4

直井優，盛山和夫，　間々田孝夫，　富永健一

『日本社会の新潮流』　東京大学出版会 1993 年　p92

ジェレミー・シーブルック著『グローバリズムと不平等』青土社　2004 年 p25,38,51

三浦展著『下流社会　新たな階層集団の出現』光文社　2005 年 p7

リチャード・ホガート著『読み書き能力の効用』晶文社　1974 年 p18,250

橋本健二著『新しい階級社会　新しい階級闘争』光文社　2007 年 p107

引用 URL

総務省統計局『統計でみる市区町村の姿 2011』

http://www.stat.go.jp/data/ssds/5b.htm（最終閲覧日 2012 年 12 月 5 日）

総務省『国勢調査』社会保障・人口問題研究所『将来推計人口』

http://www.dbj.jp/reportshift/area/hokkaido_s/pdf_all/hokkaido40.pdf（最終閲覧日 12 月 5 日）

参考文献

好井裕明著『「あたりまえ」を疑う社会学　質的調査のセンス』光文社新書　2006 年

三浦展著『下流同盟　格差社会とファスト風土』朝日新書　2006 年

小沢雅子著『新・階層消費の時代』朝日文庫　1989 年

原清治　山内乾史著『「使い捨てられる若者たち」は格差社会の象徴か』

ミネルヴァ書房 2009 年

ポール・ウィリス著『ハマータウンの野郎ども』ちくま学芸文庫 1996 年

鈴木謙介著『カーニヴァル化する社会』講談社　2005 年

D.キャナダイン著『イギリスの階級社会』日本経済評論社　2008 年

向井利昌『階級構造の基礎理論』日本評論新社　1963 年

坂田稔『ユースカルチュア史―若者文化と若者意識』勁草書房 1979 年

伊奈正人『若者文化のフィールドワーク―もう 1 つの地球文化を求めて』

勁草書房 1995 年

石田浩，近藤博之，中尾啓子『階層と移動の構造』東京大学出版会 2011 年

数土直紀『日本人の階層意識』講談社 2010 年

浅野智彦『若者とアイデンティティ』日本図書センター2009 年

鈴木賢志『日本人の価値観―世界ランキングから読み解く』中央公論新社 2012 年